



小島烏水全集

第九卷

大修館書店

小島烏水全集 第九卷 (第八回配本)

定價八八〇〇圓

昭和五十六年九月一日印刷
昭和五十六年九月十日發行

著 者 小 島 烏 水

發行者 鈴木敏夫

印刷者 青 木 勇

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三十二四
電話〇三(二九四)二二二一(代表)
〒一〇一 振替(東京)九十四〇五〇四

第九卷 目次

氷河と萬年雪の山

序

米國の「山岳氷河」——富士火山帶及日本アルプスとの比較地形

一 「生きた氷河」の發見

二 太平洋コルデエラ

三 月夜の曠野をさまよふ如く

四 異郷に見る富士の影——シヤスタ火山

五 典型的なアルプス式氷河

六 キヤスケード火山氷河の特徴

七 山上の幻覺

八 シエラ山と日本アルプス

九 氷河地形分布の比較

十 ヨセミテ峡谷と上高地

氷河の谷から萬年雪の山へ——米國太平洋岸高山氷河踏査研究の記錄

- 一 氷河線の東漸
 - 二 日本に於ける氷河時代
 - 三 飛驒山脈の舊氷河とシエラの現存氷河
 - 四 拾つた漂石
 - 五 上高地とヨセミテ谷の氷蝕地形
 - 六 レイニニア山の氷河(上)
 - 七 レイニニア山の氷河(下)
 - 八 マウント・フツドの立體感
 - 九 マウント・フツドの氷河考察
 - 十 日本アルプスの回春
- シエラ・ネヴァダと飛驒山脈の比較
- 火と氷のシヤスタ山
- フツド登山
- 一 登山短信
 - 二 フツド山の岩石及び氷河
 - 三 山に召された人々

六 五 四 三 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

ベエカア山の氷河登攀

九

ベエカア山氷河手帖

一二三

シュクサン氷河へ墜死した古谷久三君

一二六

山と氷河の古本を漁る

一二三

氷蝕のロツキイ山

一二三

日本アルプス縦横

一二六

一 日本アルプスとは何ういふところか

一二六

二 日本アルプスの名稱

一二八

三 日本アルプス登山小史

一四〇

四 外側から見た日本アルプス

一四三

五 雪の北アルプス

一四五

六 水の北アルプス

一四七

七 岩壁の中央アルプス

一四九

八 大きい南アルプス

一五二

12 槍ヶ岳の昔話——志賀矧川とウエストン

一五五

日本アルプス風景

一七五

日本アルプス國立公園のカアル帶

一八二

日本アルプス雪蝕地形論

一八八

一 序 説

一八八

二 地殻の證券に残す氷河の文字

一九九

三 萬年雪の造るU字谷

二〇六

四 氷河湖

二〇八

五 堆 石

二二三

六 雪蝕カアル

二三三

七 萬年雪の流動

二三六

八 カアル地形なき高山

二三六

九 日本の假想氷河期

二四〇

十 結 論

二四一

不盡の高根

二四五

一 江戸と東京の富士

二四五

二 裾野の水車

二四九

三 大宮と吉田

二五二

四 富士淺間神社

二五六

五 旅人の「山」

二五九

六 富士の古道

二六二

七 石楠花

二六五

八 室

二七〇

九 亂雑の美

二七四

十 八ヶ岳高原

二七九

お札博士の富士山講演

二八三

木曾街道の錦繪——浮世繪風景畫史上の小發見

二八九

卷後に

二九七

圖版解説

二九八

泰西創作版畫展覽會目錄

序

三〇九

はしがき

三一一

泰西創作版畫展覽會目錄

三三三

滯米時代とその回想

米國の山岳と登山家

序 説

一 東部地方の平原（アバラキアン山脈）

二 中部地方の高原（ロツキイ山脈）

三 西部山岳地帯（シエラ・ネヴアダ山脈）

四 北西部山岳地帯（キヤスケード火山脈及びオリムピツク山脈）

米國の山岳探検

米國極北の二名山

フツド火山の氷河を登る

滯米回想記

ヨセミテ溪谷への美的散歩

*

《滯米記事》

熱帯の海から——ホノルルにて

三六七

三八七

三八八

三九一

三九五

四〇六

四二〇

四四七

四四九

四五四

四六五

四七一

丸山晚霞への手紙

四七四

桑港便り

四七六

『戦後の日米』序文

四八一

短 信

四八二

趣味と嗜好

四八二

桑港より

四八三

ボストンから

四八四

米國通信

四八四

櫻府日本銀行との關係に就きて

四八五

版畫としての曆及び賀狀

四八八

佛國版畫

四九一

マリボサの大木と「新世界」

五〇一

買物をしながら——米國の裝飾美術に就きて

五〇二

氷河と日本アルプス

五〇五

故國の友へ

五二〇

展覽會出品の版畫

五二一

感謝の辭

五二三

桑港の友へ

五二四

談話記事

五二五

山の勇者海では弱者

五二五

大戦と經濟界

五二五

日本の山と加州の山

五二七

グランド・キャニオン周遊

五二九

彫蝕版の美術上の位置

五三〇

一時歸國の辯

五三三

正金は代が替つても遣方は變らぬ

五三三

本業と副業

五四

日米間の爲替相場

五四

日本の經濟界は不安

五五

日本の經濟政策

五六

將來は平和戦に勝たねば成らぬ

五七

日本の綿絲株式又暴落

五八

物價低落と相伍して徐々に足許を固めよ

五八

爲替低落の理由	五〇〇
日米爲替低落の眞因	五〇一
故國銀行預金の利子引下げ？	五〇二
櫻府日銀再開に援助	五〇三
生絲市價略決定	五〇三
櫻府日銀再開に就いて	五〇三
櫻府日銀整理	五〇四
正金銀行ハルピン支店で弗紙幣を發行實施	五〇五
南カリフォルニア視察談	五〇六
安田善次郎翁死去	五〇七
獨逸の康賣商策	五〇八
金利引上げ問題	五〇九
預金利子引上げ斷行	五〇九
錦繪展覽會の開催に就いて	五〇〇
日本の山岳美を世界に紹介	五〇一
金輸出解禁問題が爲替騰貴を促す	五〇一
開放的な南加の空氣	五〇二

事業者は年老い後繼者は尙年少也

五四四

日米貿易の振興時代か

五四五

同胞商人の協調が肝要

五四六

存在の意義を完ふせよ

五四七

登山の妙味

五四八

爲替相場下落と横濱正金の相場

五四九

江戸情緒を偲ばせる浮世繪展覽講演會

五五〇

爲替相場強調の實情

五五一

フツド山より歸桑

五五二

暮れは迫つても同胞の貯金は殖える

五五三

ラスキン禮讃

五五三

ベエカア登山談

五五四

登山の話

五五五

本店に榮轉の電命來る

五五七

東西版畫の相互化

五五七

解題・解説

近藤信行

五五九

氷河と萬年雪の山

氷河巡禮の同行

東良三君及び

故古谷久三君に獻ぐ

